地域に生きる高校生は、いま何を考え、感じ取り、行動することが求められるのか

～地域学を学ぶ先輩の言葉を手がかりに～

石動高校は富山県内の高校で最も西に位置し、地元の小矢部市内の生徒が4割、隣接する市から通う生徒が5割である。自覚していようといまいと、生徒はこの地域の風土や文化に日々寄り添いながら暮らしている。本校卒業後に慣れ親しんだこの土地を離れ、新たな水を得て生活を始める人、また再びこの地域に帰ってくる人、この先に歩む道はさまざまであるが、いまこの高校生の間に、いま暮らすこの場所で得られるものは何なのだろうか。

「地方創生」、また一方で「地方消滅」などという言葉が声高に叫ばれる現在、本校の生徒代表として「高校生とやま県議会」に参加した二人の在校生と、現在大学で地域学を学ぶ二人の卒業生をゲストに迎えて話を聞いた。

卒業生×在校生クロス対談

地域学を大学で学ぶ先輩

高校生とやま県議会で地域を考える在校生

高校生活での思い出を語る毎田さん

大学でいま どのようなことを学んでいるのか

毎田さんは、石川県にある金沢大学に通う二年生で、人間社会学域の地域創造学類に在籍している。一年生の段階では、浅く広く地域のテーマを全員が習う。二年生になると、自分の進みたい職業に向けて少人数のコース別に分かれる。毎田さんは現在、社会福祉士を目指して、福祉マネジメントコースで勉強をしている。福祉マネジメントコースでは、福祉の歴史やあり方についての知識を深めるという基本的なことだけではなく、グループワークやカウンセリングなど、人とのコミュニケーションをとる授業もある。

大学で一番苦労したことはアンケートの作り方だという。誘導尋問にならないようにすること、結果が分かるものは作らないように気を付けるのが大変だったと話す。その他にも、トークスキルをつけるために一週間の出来事を話すなどの活動をしているそうだ。

また、毎田さんが金沢大学を目指すきっかけとなったのは、家族が医療系の仕事をしていたこと、先生から勧められたこと等、周りの人々の環境が関係している反面、地元が好きで、小矢部から離れたくないという思いもあったからだという。

小矢部市が10年ごとに策定している市の総合計画の検討会議に、福祉の専門部会の一般公募の参加者として加わった。「難しい専門用語が多く出てきて、会議の内容を理解するのが大変だった」と振り返る毎田さん。「自分が社会福祉士として地域で働く際に、この経験は生きてくると思う」と、参加しようと思った理由を話した。

篠原さんは、京都府にある福知山公立大学に通う二年生で、地域経営学部で学んでおり、二年生のゼミでグループに分かれて自分が興味を持った研究テーマについて調べている。篠原さんは「中山間地域の町では今どのような生活をしているか」というテーマについて学んでいる。

町の歴史については、文化や伝統を受け継いでいくために、実際に現地に行って実態を把握し、現地の産業や文化を利用してどのように活性化させられるかについても考えている。

町の農業については、現在、農業関係に携わる高齢者が多いため、行政の手厚い支援が必要である。そのため、新しく農業をする人をどのようにその地域に連れてくるかということが課題だと真剣な眼差しで語った。

また、今の学部に行って良かったこととして、毎田さんは「少人数だからこそお互いに言いたいことを言い合える環境」、篠原さんは、「全国から集まった仲間から刺激をもらえること」だと述べた。

篠原さんらが一年生で行った研究をまとめた冊子（左）と毎田さんが参加した小矢部市の行政計画案（右）
※行政計画の冊子は前回計画のもの

「高校生とやま県議会」とは

「高校生とやま県議会」とは、高校生の自ら政治に参加する意識や、地域社会に参加するという意識の向上を図ることを目的に平成28年度より実施されているものである。県内の高等学校の生徒会代表40名（代表は生徒会執行部経験者や、この事業の内容に興味のある生徒などから選ばれる。）議会は、「産業・観光の振興」、「子育て支援・少子化対策」、「教育の充実・文化・スポーツ振興」、「医療・福祉の充実」、「安心・安全な県づくり」の5つの委員会に分かれて意見交換を行い、本会議に向けて、議会に提案する内容をまとめ、提出する。

県の行政に関心を持ち、政治への参加意識を高めていくために、実際の県議会の見学や、知事や県議会委員との意見交換会も設定されている。

「高校生とやま県議会」の活動は、第1回目に開会式等、2回目は実際の委員会の活動開始、3回目は、県議会傍聴や県知事や県議会議員との意見交換、4回目には、5つの委員会が集まり意見交換をする本会議が開かれるという流れで実施される。この本会議では、各委員会から元気とやまを創造するための提案を行う。

高校生とやま県議会に参加して

この「高校生とやま県議会」に石動高校から、昨年度は34H宮崎友理さん、本年度は23H土谷優実さんの2名が参加した。土谷さんも宮崎さんも「医療・福祉の充実」の分野で活動し、そのテーマの中でも土谷さんは「医療」の分野、宮崎さんは「福祉」について意見交換を行った。

土谷さんは、「医療」の分野で特に「健康・平均寿命」について他校の代表生徒と意見を交換し合った。土谷さんは、寿命が延びれば孫やひ孫の顔が見られる、定年してからの生活を楽しむことができることから、いかに健康寿命を延ばすかについて考えた。まず、各学校の生徒に健康に対する意識のアンケートをとった結果、寿命や健康について考えている割合は、全体の半分程度だった。このアンケートをもとに高校生ができることを考えた。例えばウォーキングイベントを開催することや、歩いた分だけポイントが貯まりポイントで商品を交換できるアプリを作る、高校生がよく使うツイッターやフェイスブックなどのSNSを使い、健康への意識を高める発信をすることなどだ。これからの活動で、さらに考えを深めていく予定だという。

宮崎さんは、「福祉」の分野で特に「高齢者の福祉」について他校の代表生徒と意見を交換し合った。宮崎さんは、最初は福祉に関する興味がなかったが、挑戦することに意味があると感じて実際にボランティアに参加すると、福祉への興味がわいてきたと話した。高齢者の防災について考える中で、高齢者でも見やすい防災マップを考案した。

4回しか委員会のメンバーと会えず、うち1回は発表のため、互いの意見を合わせることがとても難しかったが、この高校生とやま県議会を通して自分の意見が言えるようになったことや、意見のまとめ方を学ぶこと、知事や議員といった大勢の人の前で発表する力、少ない時間での各学校の代表者との意見交換に必要なコミュニケーション力などが身についたと話した。

これらの経験を生かして、宮崎さんは昨年度の生徒会長を務めあげた。また土谷さんも後期生徒会長に立候補して当選し、「高校生とやま県議会」で得た刺激を生かそうと現在奮闘中である。土谷さん、宮崎さんとも、自分の興味のあることに、なんでも挑戦していきたいと話した。

他校の生徒との活動は刺激になったと語った宮崎さん

今年度の「高校生とやま県議会」の活動について語る土谷さん

これからの高校生に望むこと

宮崎さんは、「最近の高校生はSNSばかりしている。だから、現在の世の中を全然見ることができていない。また、当たり前のルールが守られていないところがある。例えば、女子生徒のスカートが短いなどの制服の身だしなみができていない。こういう小さな当たり前のルールを見直していくことが私たち高校生に求められていると思う」と話した。

毎田さんは、「宮崎さんと少し似ているが、自分が高校生のとき感じなかったことに、立場が変わった今になって気づくことがたくさんある。制服の身だしなみもそうだが、学校から石動駅までの道のりで、横断歩道でないところで渡ったり、お客さんに挨拶をしないなど、運転する立場、来校する立場になって分かったことがある。人と価値観の違いはあるが、そういう石動の生徒の態度を見て、不満に感じる人はいると思う。また、将来は小矢部市を離れていく人や、この三年間しか小矢部市にいない人がいるのだから、小矢部市の良い所も悪い所ももっと知っておくべきだと思う」と語った。

土谷さんは、「大人や周りの人から与えられる情報だけでなく、主体的に知りたいことに興味を持つことが大切だと思う。入り口を見つけなければ、その奥のことは分からない。入り口を見つけるためには、親や近所の人の職業について調べ、身近なことから知るべきだと思った。また、興味を持つ内容は人それぞれ違うので、好きなことを一生懸命やることも大事だと感じた」と述べた。

篠原さんは、「自分もそうだったが、今の高校生たちは、自分でやりたいことを決めたり、意見を持つことは少ない。それに比べて、誰かに言われたからやることは多い。そういう時は、自分の意見は無視している。そして、その選択は後から後悔する選択だと思う。自分より目上の人や親、友人に言われたからやるのではなく、自分から行動することが大事だと思った」と語った。

高校生の時にはどのようなことを考えていたのか

毎田葵さんは、生まれ育った地元が好きで、今も実家から大学に通っている。そんな地元の役に立ちたいという思いから、市役所のボランティアに参加したり、社会福祉士の方に話を聞いたりと、高校生の間に一つでも多く経験を積むため積極的にさまざまな活動に参加してきた。この経験は、大学の入試面接でとても役に立ったそうだ。そして今は、メルヘンメイトとして地域のPR活動に貢献している。その中で、市が現在力を入れている政策、祭りの運営の工夫、アウトレットモール等の店にどのように人を呼ぶかなど、この仕事に関わるまで気づくことのなかった政策を知ることができたそうだ。これまで積み上げてきた経験は、自分がやりたいことへ近づくことができる力になるのだと、成長の喜びを語った。

篠原和真さんは、田舎にはまだ横のつながりがあり、そんな地域の活性化に貢献したいという思いから、公務員になりたいと思っている。高校生時代、歴史が非常に好きだったらしく、現在生活している福知山周辺の地域の文化や伝統を知る際に、歴史的な知識や視点がとても役に立っているそうだ。

大学でのフィールドワークについて話す篠原さん

「地域・地元で活躍する人財が求められています」

福知山公立大学 地域経営学部 地域経営学科長
教授 矢口芳生

福知山公立大学のある京都府福知山市は、人口8万ほどの地方都市です。「いがいと！ 福知山」のキャッチフレーズのとおり、都会と田舎が同居する快適なところです。ひとつ難をいえば、豪雨があると市内を流れる由良川が氾濫危険水位に達することで、今夏は警報が頻繁に鳴りました。

福知山市でも人口の減少は止まりません。なかでも山間部は流出が顕著で出生率が極端に低い状態が続いています。小学校の統廃合が進み、さらに小中学校の統合が進んでいます。「限界集落」も増えています。

こうした光景は全国どこでもみられるようになりました。石動高校のある小矢部市にも似たような状況があるのではないでしょうか。今や、一人ひとりが知恵を出し、立ち上がり協働しなければならない時代になりました。

このような人口減少や若者流出に対してI・Jターンが叫ばれていますし、注目もされています。しかし、息子や娘に誇れない地元に「よそ者」は来るのか、誇れない地元に「よそ者」を呼ぶとは無責任ではないか、「よそ者」だからと高を括っているのか。こんな声も聞こえてきそうです。

「よそ者」は都会にはない田舎の魅力に気づき、「田舎力」ともいうべき価値に共感しています。田舎には共助的協働的人間関係、良好な自然・景観・環境・文化、豊富な自然の恵み、そしてゆったりと流れる時間があります。田舎には未来社会をどこか先取りした空間があり、「よそ者」はそれを知っています。

その地域に住み慣れた人々は、こうしたことには意外に気づきません。皆さんも地元を見直してみてください。若い人が広い世界をみることはたいへん良いことです。そしてまた、都会に出てみて郷里の良さがみえてくることもあるでしょう。そんな時には、郷里は担い手として若い力を必要としていることを思い出してください。

福知山公立大学地域経営学部では、社会人としての基礎力と行動力をもった、地域の課題解決や持続可能な発展に貢献できる、そして外国人にも対応できる公務員・会社員といった人財の育成を目指しています。全国各地から優秀な学生が本学に集まっています。2020年度には地域貢献型の情報学部の開設を予定しています。皆さんの本学への挑戦を期待しています。

篠原さんの2年生の時間割

【前期】（4月～7月）

時間	月	火	水	木	金
1	生物学		「持続可能な社会」論		
2	中国語Ⅲ	流通システム論		グローカル特別講義Ⅲ（地域林業経営論）	財政学
3	保健体育	地域防災論	統計学	地域経営演習Ⅲ	
4	ミクロ経済学	心理学	グローカル特別講義Ⅲ（地方行財政）	地域経営演習Ⅲ	民法

※授業の1時間は90分

【夏休み】（8月～9月）
夏休みには、バイトに励んだり、旅行や留学に出たり、実家に戻ってゆっくりしたり、研究活動に出かけたりする。集中講義という形式の授業もある。

2年の夏休みには、「倫理学」と「経営分析」の2種類の集中講義を受けて、授業単位を増やした。1つの集中講義は朝～夕方を3～4日間。

【後期】（10月～2月）

時間	月	火	水	木	金
1	経営戦略論		地域農業システム論	介護福祉論	数学応用
2	中国語Ⅳ	地域産業論		ゼミ・研究活動の日	
3		自治体政策法務	社会調査論	ゼミ・研究活動の日	地域経営演習Ⅳ
4	経営組織論			ゼミ・研究活動の日	地域経営演習Ⅳ

この「地域経営演習」で、地域に出ていって現地での研究活動（フィールドワーク）を行う。1年生の頃からフィールドワークがあるのが福知山大学の特徴。